



Title	折り曲げ鉄器の副葬とその意義
Author(s)	清家, 章
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2002, 36, p. 1-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48076
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

折り曲げ鉄器の副葬とその意義

清 家 章

1. 研究史と本稿の目的

弥生時代から古墳時代の墳墓に鉄器が折り曲げられて埋葬施設の中に納められる例は、これまでに多く知られていた。こうした鉄器を「折り曲げ鉄器」と呼ぶことにしよう¹⁾。折り曲げ鉄器の意味するところに関しては明確な見解が示されたことは少ない。鉄器を使用できない形状に変形するという行為に、祭祀的意義を見いだすにとどまり、まとまった考察が少ないのが現状である。

そうした状況の中、佐々木隆彦は九州の資料を中心に折り曲げ鉄器を集成し、その鉄器が故意に変形されたものかどうかを逐一検討した上で、その器種・分布・時期などの基礎的整理を行った(佐々木1988)。その結果、折り曲げ鉄器は弥生時代終末期から古墳時代前期を中心に多く存在し、西日本一帯で散見されることなど、折り曲げ鉄器に関する基本的な傾向を明らかにしている。さらに、佐々木は折り曲げ鉄器が墳墓における破碎土器や穿孔土器と関連があるのではないかと推測し、死者が現世に復活することへの畏怖を表現したのではないかと推測する。

北條芳隆は、四国の前期古墳における鏡の副葬を概観する中で、鏡の破碎副葬が「中・西部瀬戸内地域一体」に広まった習俗であるかもしれないと指摘した上で、鉄製工具類の折り曲げ行為もこの地域に多いと述べて、鏡の破碎副葬と折り曲げ鉄器の関連を示唆し、この地域の前期古墳の特徴

であると理解している（北條1994：p.148）。後で述べるように折り曲げ鉄器は関東から九州地方まで広い範囲に分布する。中・西部瀬戸内地域に特有な存在ではないが、この地域からの出土は多い。なぜ、折り曲げ鉄器がこうした地域に多く見ることができるかを説明する必要がある。

丹後と丹波の折り曲げ鉄器を破砕鏡などとともに検討した長谷川達は、

- ①折り曲げ鉄器が弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて存在する。
- ②折り曲げ鉄器が副葬される古墳には、大和政権から配布された威信財が副葬されることが多い。
- ③円形を基調とする墳墓あるいは円形原理の墳墓に隣接する墳墓から出土する事例が多い、などの特徴を指摘した（長谷川2001）。

これらのことから、折り曲げ鉄器は「大和政権の影響力」が各地域に浸透した結果であると述べる（長谷川2001）。ただ、長谷川のいう「大和政権の影響力」がどのようなものであり、どういった過程を経て鉄器を折り曲げるといふ儀礼が産み出されたかについては説明がない。

以上の研究史において、折り曲げ鉄器が弥生時代終末期から古墳時代前期に多く認められるという事実が共通して指摘されている。このような状況から、折り曲げ鉄器の副葬は前方後円墳が出現する前後におきた社会的・政治的変動を反映した行為であると考えられているようである（北條1994、長谷川2001）。しかし、鉄器を折り曲げるといふ行為にどのような意味があるのかという点が、これまでの研究で問われておらず、この点が大きな課題としてある。折り曲げ行為の意味するところを明らかにしないで、折り曲げ鉄器の分布や存続時期などの現象面だけを俎上にあげたとしても、その結論は空疎なものとならざるを得ないからだ。これまでの研究では、折り曲げ鉄器が鏡や土器などの他の器物破砕行為と関連することが示唆されているにとどまる。しかし、鏡や土器の破砕と折り曲げ鉄器が同一墳墓で併存する事例が多いわけではないので、そうした指摘すらまだ仮

説の域を出ない見解なのである。

本稿では折り曲げ鉄器を再集成し、折り曲げ鉄器が副葬された墳墓の時期・埋葬施設・副葬品目などを整理する。そうした作業を通じて抽出された折り曲げ鉄器の特徴をもとに、鉄器を折り曲げる意義について考えてみたい。

なお、墳墓に複数の埋葬施設が存在する場合、墳丘の中央部に設けられたもっとも中心的な埋葬施設を主要埋葬施設と呼び、墳丘の主要平坦面に設置されたその他の埋葬施設を副次的埋葬施設と呼ぶ。また、墳丘斜面・裾ならびに周溝の内外に設けられた埋葬施設を周辺埋葬施設と呼ぶ。

2. 折り曲げ鉄器の副葬とその特徴

佐々木と長谷川によって、折り曲げ鉄器の集成作業が行われている(佐々木1988、長谷川2001)。彼らの作業を参考にしつつ、あらためて折り曲げ鉄器の資料を求めた結果、およそ100例を集成することができた。報文を検討し、鉄器自身の腐食や棺の埋没などの影響により曲がった可能性を持つ鉄器をできるだけ除いている。これらの資料をもとに折り曲げ鉄器に関する基本的な整理をあらためて行うこととする。

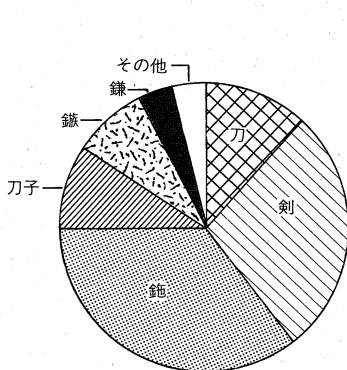


図1 折り曲げ鉄器の種類

鉄器の種類 折り曲げられた鉄器の種類は多いが、その中でも刀剣類が最も多く、次いで鉞が多い(図1)。この3種類で折り曲げ鉄器の約75パーセントを占める。器種の選別において定期的に顕著な変化は認められないが、古墳時代後期になると鉄鎌が折り曲げられる例がやや目立つようになる。

村上恭通によれば、鉄器が折り曲げ

表1 折り曲げ鉄器一覧

7

遺 跡 名	所在地	墳形	墳丘規模 (m)	位置	器種	副葬 位置	供伴鏡 数(枚)	赤色 顔料	備 考
大道小学校校庭遺跡1号石棺	熊本県山鹿市	／	／	／	剣(槍)	a・g	0	無	
池の上1号墳3号主体	福岡県甘木市	方	13.5	副	刀	e	0	無	
池の上1号墳4号主体	福岡県甘木市	方	13.5	副	鈍・鋸	d	0	無	
竹並A-12号墳第1主体	福岡県行橋市	円	13	副	刀子	d	0	無	
高島遺跡S-1石棺	福岡県北九州市	／	／	／	鈍	f	1	無	鏡片出土
七曲山第3号墳B主体	福岡県久留米市	円	20	副	剣	g	0	有	
若八幡宮古墳	福岡市	方円	?	主	鈍	f	1	有	
祇園山古墳周辺石蓋23号土坑墓	福岡県久留米市	方	25	周	手鎌	a	0	有	
唐人塚2-4石蓋土坑墓	福岡県筑紫野市	／	／	／	刀子	a	0	無	
唐人塚2-5石蓋土坑墓	福岡県筑紫野市	／	／	／	鎌	d	0	?	
妙見14号墓	福岡県朝倉町	方	8	主	鈍	h	0	有	
妙見17号墓	福岡県朝倉町	方	7	主	鈍・刀子	d・d	0	有	
徳永神手8号墓	福岡県豊津町	?	?	?	鈍	a	0	?	
穴ヶ葉山72号墓	福岡県大平村	／	／	／	鈍	a?	0	有	
原田遺跡墓群C1号墓	福岡県嘉穂町	／	／	／	剣	g	1	有	破鏡
博多遺跡方形周溝墓	福岡市	方	16×10	主	剣	a	0	有	
羽根戸南G-3古墳	福岡市	方円	20	主	剣	f	1	有	破鏡
那珂遺跡	福岡市	／	／	／	剣	h	0	無	
松ノ尾1号墳	福岡県志免町	方	10	主	剣	c	0	有	
新町遺跡7号石棺	福岡県志摩町	／	／	／	刀子	a	0	無	
新町遺跡2号甕棺	福岡県志摩町	／	／	／	刀子	f	0	有	
草場第2遺跡68号土坑墓	大分県日田市	／	／	／	刀子	a	0	有	
草場第2遺跡72号土坑墓	大分県日田市	／	／	／	鈍	a	0	有	
朝日北ST01号墳1号主体	佐賀県神埼町	方	10	?	鈍	d	0	?	
朝日北ST10号墳1号主体	佐賀県神埼町	方	8	副	鈍	f	0	有	

遺 跡 名	所在地	墳形	墳丘規模 (m)	位置	器種	副葬 位置	供伴鏡 数(枚)	赤色 顔料	備 考
西一本杉遺跡 ST008	佐賀県東背振村	円	15	主	鈍	c	0	無	
熊本山古墳	佐賀市	円?	30?	主	剣・鈍	a・g	1	?	
桂見墳墓 1 号墓第 1 主体	鳥取市	方	22.5	主	剣	f	0	無	
妻木晩田14号墳第 1 主体	鳥取県大山町	方	15	主	剣	b	0	無	折り曲げ鉄器か?
覚寺12号墳	鳥取市	方	7.5	主	鎌	d?	0	有	
奥才14号墳第 1 主体	島根県鹿島町	円	18	主	剣?・鈍・ 刀子・不明 鉄製品	f	2	無	剣と不明鉄製品の 折り曲げは疑問
奥才14号墳第 2 主体	島根県鹿島町	円	18	副	剣?・刀子	e	0	無	折り曲げ鉄器か?
西谷16号墳	島根県出雲市	円	11	主	剣 2	f	0	無	
袋尻 4 号墳土器棺	島根県松江市	方	7.5×3.5	副	剣	g	0	無	
石槌山 1 号墳	広島県福山市	円	20	主	鈍	f?	1	有	折り曲げ鉄器か?
石槌山権現 5 号墳	広島県福山市	方円	38	主	鈍	h	1	有	
矢谷四隅突出墓No. 1 主体	広島県三次市	四隅	19×13	副	鈍	a	0	無	
殿山10号墳第 1 主体部	岡山県総社市	方	15	主	剣	h	1	無	
殿山12号墳	岡山県総社市	方	12	主	鈍	h	0	?	
川戸 2 号墳	岡山県大原町	方	17×14.5	?	刀	h	0	?	
用木 1 号墳	岡山県山陽町	円	31	主	鈍	d	1	有	
有本 1 号墳第 2 主体	岡山県津山市	方	16×13	副	鈍?	b	0	無	
有本 2 号墳第 1 主体	岡山県津山市	方	12×9	主	鈍	a	0	無	
近長丸山 1 号墳	岡山県津山市	円	20	?	鈍	g	0	?	墳丘出土
近長丸山 2 号墳	岡山県津山市	方	12	主	剣・鎌	a・a	0	有	
みそのを46号墳第 1 主体	岡山県御津町	方	10	主	刀子	d	0	無	
みそのお遺跡42号墳第 3 主体	岡山県御津町	方	13	副	剣	c	0	有	
みそのお遺跡42号墳第 5 主体	岡山県御津町	方	13	副	剣 or 槍	b	0	有	
西山 3 号墳	岡山市	円	9.5	主	鉄鎌	h	0	無	折り曲げ鉄器か?
浅川 3 号墳	岡山市	円?	6	主	剣	d	1	有	

遺 跡 名	所在地	墳形	墳丘規模 (m)	位置	器種	副葬 位置	供伴鏡 数(枚)	赤色 顔料	備 考
奥第3号墳箱形石棺	香川県寒川町	方円	37	副	鈍	b	0	有	
唐子台第10号丘4号土壙墓	愛媛県今治市	方円	15	主	剣	d?	0	無	
唐子台第3号丘土壙墓	愛媛県今治市	/	/	/	剣	a	0	有	
朝日谷2号墳A主体	愛媛県松山市	方円	26	主	刀	d	2	有	破鏡か
白鷺山古墳	兵庫県龍野市	?	?	?	鈍	h	1	有	鏡片出土
養久山1号墓第6主体	兵庫県揖保川町	方円	31	副	鈍	f	0	無	
住吉宮町遺跡3号墳	兵庫県神戸市	方	11.5	?	刀	f	0	?	
権現山51号墳	兵庫県御津町	方方	42.7	主	剣	b	5	有	
東山15号墳	兵庫県中町	円	25	?	鉄鎌	h	0	無?	土圧か?
内場山墳丘墓SX14	兵庫県西紀町	方	22×20	副	鈍	h	0	無	
今井1号墳	奈良県五條市	方円	31	副	剣	g	0	無	副葬品埋納施設
石光山8号墳	奈良県御所市	方円	35	主	刀	a?	0	有	
タニグチ古墳	奈良県高取町	円	20×15	主	鈍	f	1	有	
住川2号墳	奈良県五條市	方	15	主	刀	f	0	無	
小泉大塚古墳埴輪棺	奈良県大和郡山市	方円	88	周	鈍	a	0	無	
新沢千塚109号墳	奈良県橿原市	方円	28	副	刀	b	3	無	
野山遺跡野山支群第4号墳北棺	奈良県榛原町	円	8.5	主	剣	d	0	無	
野山遺跡野山支群第5号墳北棺	奈良県榛原町	方	12	主	鎌	b	0	無	
龍王山B-10号墳	奈良県天理市	円	11	主	鎌	h	0	無	
牧野古墳	奈良県広陵町	円	60	?	刀	h	0	有	
見田大沢2号墳	奈良県菟田野町	方	14	主	鈍	e	1	無	
八尾寺第2号墳	奈良県高取町	円	10	主	剣	f	0	有	
三坂神社裏7号墳第1主体	京都府大宮町	方	16×9	主	刀子	h	0	無	
三坂神社裏6号墳第3主体	京都府大宮町	楕円	16×13	主	剣	d	0	無	
今林8号墓	京都府園部町	方	18×15	主	鈍	f	0	無	折り曲げ鉄器か?
ゲンギョウの山5号墳	京都府弥栄町	方	15×13	主	剣	a	0	無	
高山12号墳	京都府丹後町	円	18	主	刀?	h	0	無	

遺 跡 名	所在地	墳形	墳丘規模 (m)	位置	器種	副葬 位置	供伴鏡 数(枚)	赤色 顔料	備 考
太田南2号墳	京都府弥栄町	方	22×18	主	鉈?・剣	d・f	1	有	
苗代2号墳第5主体	京都府峰山町	方	19×14	副	鉈	a	0	無	
宮の森古墳3号墳第2主体	京都府弥栄町	方	14×11	主	鉈	d	0	無	
豊富谷丘陵遺跡TT1号墳第2主体	京都府福知山市	円	15	副	鉈	b	0	?	
西山2号墳東櫓	京都府城陽市	方	27	副	剣	h	0	無	
七ツ塚4号墳2号埋葬施設	京都府長岡京市	帆立	21	副	鉄鏃	b	0	有	
三田古墳	大阪府岸和田市	円	19	副	鉄鏃	f	0	無	折り曲げ鉄器か?
宮山1号墳	滋賀県野洲町	円	18	主	刀2	f?	0	有	
和田8号墳	滋賀県栗東町	円	11	?	鉄鏃	h	0	無	
冬頭山崎2号古墳	岐阜県高山市	円	20	主	鉄鏃	e	0	有	
八幡山横穴群3号横穴	静岡県袋井市	/	/	/	鉄鏃	h	0	無	
城山古墳	静岡県島田市	方	19×16	主	鉈	a?	0	有	
大星山3号墳	長野市	円	16	主	鉈	f	0	無	
寺所遺跡SM04	長野県飯田市	円	14	主	刀	e	0	無	
溜ノ台遺跡1号墳	栃木県小山市	円	16	/	剣	g	?	無	
星の宮神社古墳	栃木県石橋町	円	46	主	矛	b	0	?	折り曲げ鉄器か?
鳥越古墳	千葉県木更津市	方方	25	主	鉈	h	0	有	
山谷古墳	新潟県巻町	方方	37	主	鑿	g	0	無	

凡例

- ・墳形の項目において、「方円」は前方後円墳、「方方」は前方後方墳、「方」は方墳、「円」は円墳、「帆立」は帆立貝形古墳を示し、「四隅」は四隅突出墓を表す。
- ・位置の項目は、埋葬施設が墳丘のどの位置にあるかを示す。「主」は主要埋葬施設、「副」は副次的埋葬施設、「周」は周辺埋葬施設である。
- ・副葬位置の項目は、埋葬施設における折り曲げ鉄器の副葬位置を示す。
 - a. 被葬者の頭部周辺から単独で出土
 - b. 被葬者の頭部周辺あるいは頭部上方から他の鉄器とともに出土
 - c. 被葬者の胸部から出土
 - d. 被葬者の足下から出土
 - e. 被葬者の体部横から出土
 - f. 棺外・墓坑内から出土
 - g. その他
 - h. 出土位置不明

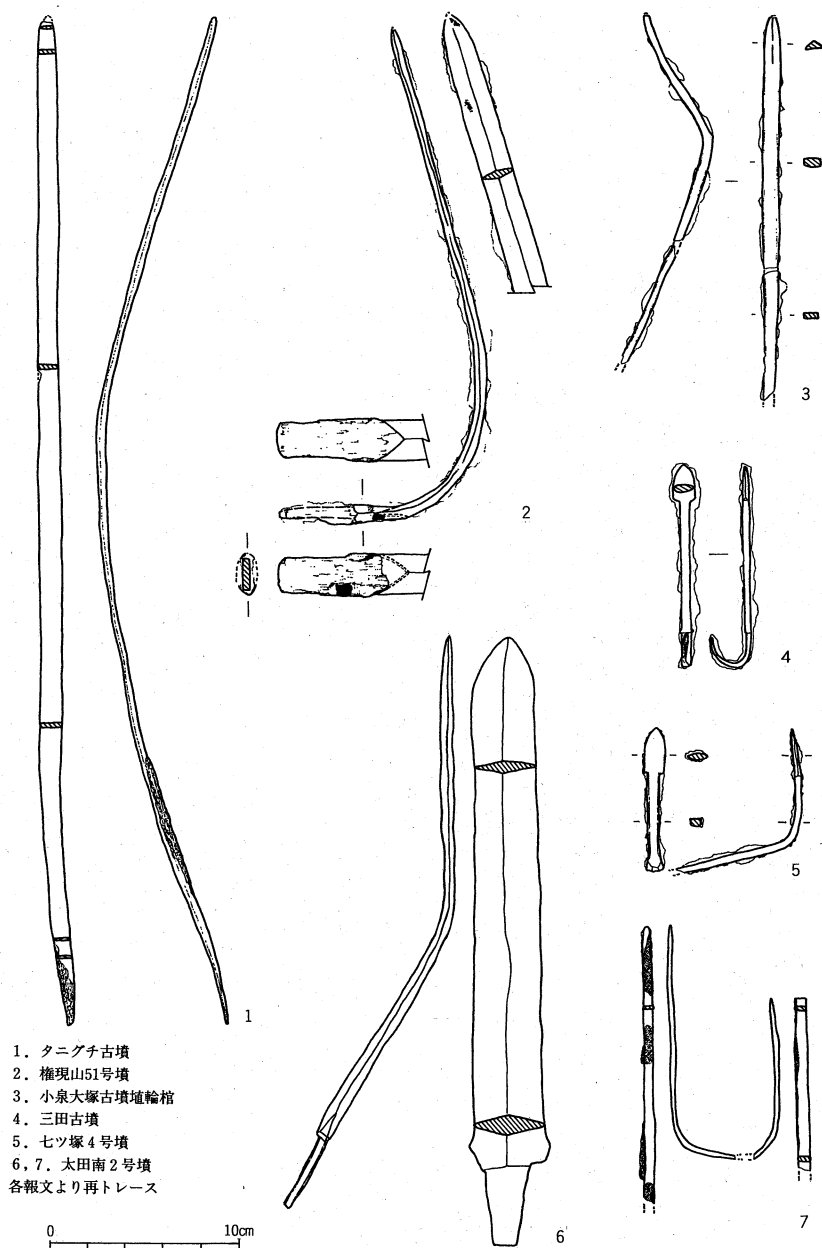


図2 折り曲げ鉄器の諸例

られるということは、表面処理（焼き入れ）が施されていないか、地金自体が低炭素鋼である可能性が高いという（村上1999：pp.117-118）。村上は、折り曲げ鉄器が製作時から折り曲げを意識して作られた可能性を示唆している（村上1999：pp.117-118）²）。

副葬墳墓の規模 折り曲げ鉄器

が出土する墳墓は、一辺・直径20メートル以下の小規模な方墳や円墳が多い（図3）。折り曲げ鉄器が出土する埋葬施設は主要埋葬施設である場合もあるが、副次的埋葬施設であるケースも多い。

20～40メートル程度の中規模の墳墓から折り曲げ鉄器が出土する事例は約30例認められるが、こうしたケースにおいても主要埋葬施設とともに、副次的埋葬施設から出土する事例が少なくない。主要埋葬施設には折り曲げ鉄器が副葬されず、副次的埋葬施設にのみ副葬される例も認められる。たとえば兵庫県養久山1号墓は全長31メートルの前方後円形の墳丘墓であるが、折り曲げ鉄器は主要埋葬施設ではなく副次的埋葬施設である第6主体と呼ばれる箱形石棺から出土している。つまり、折り曲げ鉄器は首長墓に必須な副葬品ではなく、首長墓から出土することはあっても必ずしも主要埋葬施設に副葬されるわけではないのである。

なお、丹後・但馬において、長谷川は折り曲げ鉄器が円墳や前方後円墳など円形原理の墳丘を有する墳墓か、円形原理の墳墓の近くに位置する墳墓に副葬されると述べる（長谷川2001）が、筆者の集成によれば方墳あるいは前方後方墳の埋葬施設に副葬される事例は多いので（35例）、折り曲

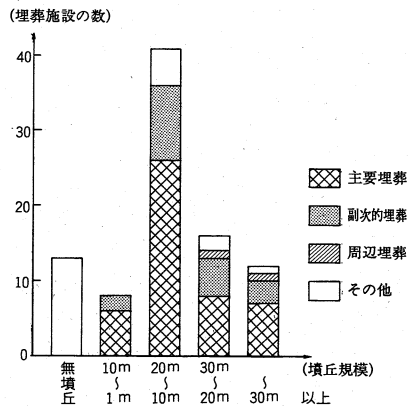


図3 折り曲げ鉄器が副葬される埋葬施設

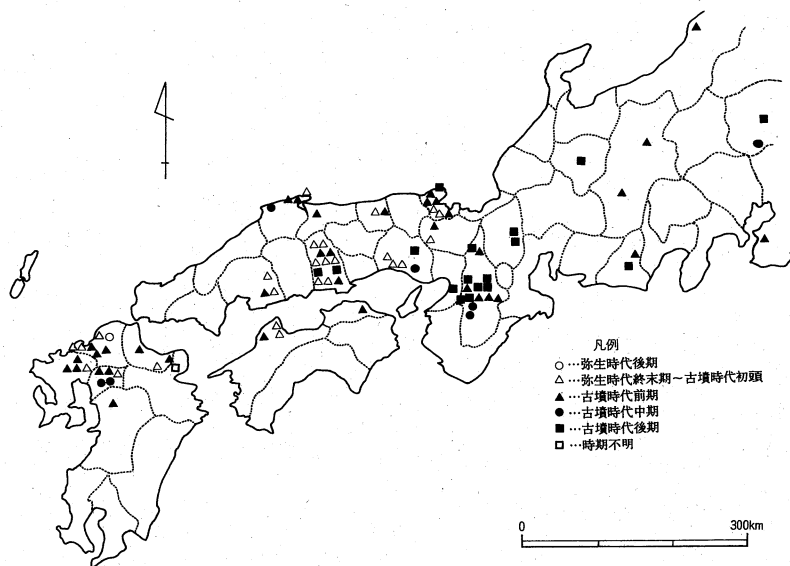


図4 折り曲げ鉄器の分布³⁾

げ鉄器副葬の特徴であるとは言い難い。

分布と時期 佐々木と長谷川がすでに指摘しているとおり、折り曲げ鉄器は弥生時代後期に出現し、弥生終末期から古墳前期にかけて盛行する(佐々木1988、長谷川2001)。しかし、中期以降も数は多くないがその存在は認められる。

時期別に見れば、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては、北部九州・瀬戸内ならびに丹後地方にその分布が認められる。古墳時代前期には畿内を含む西日本一円にその存在が認められるが、東海から東では現在のところ静岡県城山古墳など数古墳から出土しているにすぎない(図4)。

ここで注意したいことは、弥生時代後期から古墳時代前期初頭まで、折り曲げ鉄器は畿内では認められないことである。畿内周辺域にしか分布が認められないのである(表1・図4)。また、西日本一帯にその分布が広がる古墳時代前期においても、畿内では前方後円墳からの出土は認められ

ない。奈良県小泉大塚古墳の周辺埋葬である埴輪棺から出土した鉈が目立つ程度である。弥生時代後期から終末期において畿内で出土例がないことは、当該期の墳墓が畿内では調査されていないことに原因が求められるかもしれない。しかし、古墳の調査事例が多い古墳時代前期においても折り曲げ鉄器の分布の中心は畿内にあるとはいえない。この点は注意すべき特徴である。

埋葬施設における折り曲げ鉄器の配置 つぎに折り曲げ鉄器が埋葬施設のどのような場所に配置されるかをみとめることにしよう。折り曲げ鉄器が配される場所は一定ではないが、以下のような場所から出土する。

- a. 被葬者の頭部周辺から単独で出土する例 (20例)
- b. 被葬者の頭部周辺あるいは頭部上方から他の鉄器とともに出土する例 (10例)
- c. 被葬者の胸部から出土する例 (3例)
- d. 被葬者の足下から出土する例 (15例)
- e. 被葬者の体部横から出土する例 (5例)
- f. 棺外・墓坑内から出土する例 (19例)
- g. その他 (9例)。

折り曲げ鉄器が他の鉄器とともに出土する事例を含めて、被葬者の頭胸部周辺に配置される例が過半を占める点は注目してよいであろう。

鏡の破碎と土器破碎 佐々木は、折り曲げ鉄器が土器破碎の祭祀と関連すると指摘している (佐々木1988)。また、北條と長谷川は鏡の破碎と関連があるという (北條1994、長谷川2001)。墳墓における器物破壊という点では共通点を見いだせるものの、折り曲げ鉄器とそれらの器物破碎が実際に関係があるかどうかは、証明が行われているわけではない。土器破碎祭祀は丹後・但馬の弥生時代後期以降の墳墓で頻繁に認められるが、折り曲げ鉄器の分布範囲内である九州地方では行われていない。鏡の破碎事例

と折り曲げ鉄器が同じ埋葬施設で共伴する事例は5例しかない。同じ意味を持つ祭祀であれば、分布域が重なりかつ同じ埋葬施設での共伴事例がさらに多くてもよいと思われる。鉄器の折り曲げ行為が鏡や土器の破碎と無関係であるとは言い切れないが、積極的に関連づける根拠もないのである。そもそも墳墓における土器祭祀は、弥生時代以来地域性の存在が指摘されており、西日本を中心に関東以南の広い範囲に分布する折り曲げ鉄器と土器破碎とを結びつけることは無理があろう。

折り曲げ鉄器副葬の諸特徴 折り曲げ鉄器の諸特徴をまとめると以下のようになろう。

- ①弥生時代後期に出現し、弥生時代終末期～古墳時代前期に盛行するが古墳時代後期まで存続する。
- ②折り曲げられる鉄器は刀剣と鉞がその中心を占める。
- ③折り曲げ鉄器が副葬される墳墓は墳長20メートル未満の小規模な円墳・方墳が多い。
- ④主要埋葬施設とともに副次的埋葬施設から出土する場合が多い。
- ⑤関東から西日本一帯で分布が認められる。畿内にもその存在は知られるが、数は少ない。
- ⑥折り曲げ鉄器は、被葬者の頭胸部に置かれる例が過半を占める。
- ⑦土器破碎や鏡などの破碎行為は折り曲げ鉄器と関係があるとは必ずしもいえない。

3. 折り曲げ鉄器の意義

折り曲げ鉄器は弥生時代終末期から古墳時代前期に盛行する。弥生時代終末期から古墳時代前期という時期は、前方後円墳に代表されるように新たな埋葬儀礼が創出され、それらが各地に広がる時期である。前方後円墳とそれに先立つ弥生時代終末期の埋葬儀礼には、神仙思想と関わりの深い

儀礼が多いとされる。たとえば、三角縁神獸鏡はその名の通り神仙が鏡背に表現されている。また、大分県赤塚古墳における鏡配置は神仙術を記した『抱朴子』にある四矩鏡の鏡配置に類似することが古くから指摘されている（重松1969）。赤塚古墳の鏡配置だけではなく、古墳時代初頭から多量の鏡を遺体の周囲を囲むように配置する身体包圍配置（福永伸1995）や、鏡を被葬者の遺体の足下と頭部に分離して配置する頭足分離配置（藤田1993）という配置方式が存在するが、そうした配置も『抱朴子』にある四矩鏡や日月鏡などの配置と関連するものと考えられている（今尾1989、福永伸1998：p.14、福永伸2000：p.4）。古墳時代前期には鏡とともに刀剣が多量に副葬されることが多くなるが、刀剣を用いて神仙の力を得ることは、神仙術の一つであることが指摘される（福永光1973）。水銀朱あるいはそれに代わる赤色顔料の使用は、神仙術上の仙丹と関係すると考えることが一般的である（都出1998：p.54）。

このように前方後円墳とそれに先立つ弥生時代終末期における墳墓祭祀に、神仙思想と関係が深い儀礼が多いということが認められるのであれば、それらとほぼ同時期に盛行する鉄器の折り曲げ行為もまた、神仙思想と関わりを持つ可能性が考えられよう。

このような視点で神仙思想にかかわる文献をみれば、興味深い一節が葛洪の記した『神仙伝』にある。葛洪は西晋時代の仙道学の第一人者であり、『抱朴子』の著者として知られる。『神仙伝』に記された仙者の一人である孫博は「能く鏡を引いて刀と為し、刀を屈げて鏡と為」したという。鏡と刀は神仙の力を得るための重要なアイテムとされ、邪を避けるために刀剣と鏡を用いる場合があるなど、両者は深い関係にある（福永光1973）。こうした脈絡から考えると、孫博はいたずらに鏡と刀を変化させたのではなく、鏡と刀が神仙術上関連があるが故に、鏡を刀に、刀を鏡に変化させたものと推測できる。刀を曲げて鏡ができるのであれば、刀を折り曲げて鏡

の役割を担わせた可能性は十分考えられる。少なくとも、西晋時代に刀を折り曲げて鏡に変化させるという呪法が伝えられていたことは重要である。

『神仙伝』において孫博が折り曲げるアイテムは刀であるが、墳墓から出土する鉄器では様々な種類の鉄器が折り曲げられている。しかし、もっとも数多く折り曲げられる鉄器は刀およびそれと類する機能を持つ剣であり、この点で『神仙伝』の記述と一致するとしてもよいであろう。鉈や他の鉄器が折り曲げられるが、これは神仙思想やその儀礼が中国から伝わる際にそのまま伝わったのではなく、変容して伝えられたことを示すのかもしれない⁴⁾。鉄器を折り曲げることで神仙術上、鏡と同様の役割を果たすという想定が認められるのであれば、鏡と同じような効果を求めて折り曲げ鉄器を副葬した可能性が考えられよう。このように考えれば、折り曲げ鉄器の諸特徴は合理的な説明が可能である。

折り曲げ鉄器は墳長20メートル未満の小規模な墳墓の埋葬施設から出土することが多い。また、主要埋葬施設にも折り曲げ鉄器が副葬されることはあるが、副次的埋葬施設に副葬されることも多かった。つまり、折り曲げ鉄器は階層的に高くない被葬者に伴うのである。これを別の言い方で表

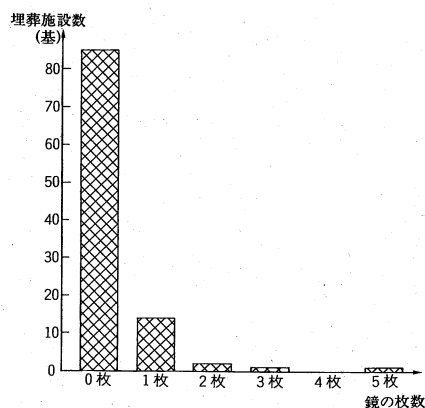


図5 折り曲げ鉄器と供伴する鏡の枚数

現すると、鏡が副葬されない、あるいは少数の鏡しか納められない埋葬施設に折り曲げ鉄器は副葬されているのである。折り曲げ鉄器が副葬される埋葬施設から出土した鏡の枚数を図5に示した。これをみれば、折り曲げ鉄器と供伴する鏡は0枚が圧倒的に多く、次いで1枚がこれに続く。折り曲げ鉄器と複数の鏡が共伴する埋葬施設

は4例しか存在しないのだ。

折り曲げ鉄器は鏡の役割を果たし、鏡の代わりに副葬された可能性を指摘した。この指摘は、鏡が副葬されないあるいは少数の鏡しか副葬しない埋葬施設に折り曲げ鉄器が納められるという事実と矛盾せず、逆にこの現象を合理的に説明することが可能である。すなわち、鏡を保有しない、あるいは鏡が副葬されることのない被葬者のために、鏡の代わりに折り曲げ鉄器が副葬されたという説明である。

古墳時代前期には、副葬される鏡の枚数や鏡の面径（今井1992）が階層差を反映する事実が知られている。副葬される鏡の枚数には一定の階層的制限があったようである。つまり、被葬者によっては階層的制限によって鏡が副葬されない人物がいたということである。折り曲げ鉄器が、鏡が副葬されない埋葬施設から出土するケースが多いことは、階層的制限により鏡を副葬されない被葬者にその代用として副葬した可能性を示す。逆に言えば、複数の鏡を副葬する埋葬施設では代用品である折り曲げ鉄器を副葬する必要がない。したがって、鏡を数多く持つ大型墳墓には鏡の代用である折り曲げ鉄器を副葬する必要がない。畿内に折り曲げ鉄器が少ないことは、同じ理由で説明が可能である。鏡の生産と保有が他地域よりも卓越しているがゆえに、その代用品である折り曲げ鉄器を副葬する必要がないという説明である。

折り曲げ鉄器が被葬者の頭胸部に配置されることが多いという点は、鏡の代用品であるとの仮説を支持しよう。鏡が1枚出土する場合は被葬者の頭胸部に配置されることが多いからだ。また、岡山県浅川3号墳のように被葬者の足下に折り曲げ鉄器を配置する例も鏡になぞらえた配置である可能性がある（図6）。浅川3号墳では、被葬者の頭部に鏡を1枚配置し、被葬者の足下に折り曲げた剣を棺の主軸と直交方向に置く。つまり、鏡と折り曲げ鉄器で被葬者を挟んでいるのである。折り曲げ鉄器が鏡の役割を

果たすのであれば、これは藤田の鏡配置分類における頭足分離配置にきわめてよく似た配置である。京都府太田南2号墳・佐賀県熊本山古墳でも同じように鏡と折り曲げ鉄器を棺の両端に配置する例が見られる。熊本山古墳は刳拔式の舟形石棺で、両端に副室を持つがその片方に鏡1枚、反対側に折り曲げた鉈が置かれていた。熊本山古墳の石棺には2名の被葬者が対置で葬られていたが、北側の被葬者の頭部付近には折り曲げられた剣がさらに置かれていた。太田南2号墳は鉈と剣が折り曲げられて副葬されているが、そのうち鉈が被葬者の足下に配されており、頭部にある鏡とともに被葬者を挟んでいるのである。

文献の記載をそのまま考古学的現象に当てはめることは危惧を感じるが、その記述が考古学的特徴を満足させることができるのであれば、それは考古学的事象の内容を具体的に示す可能性があると考えてもよいであろう。『神仙伝』の記述から推測したように、折り曲げ鉄器が鏡の役割を果たす

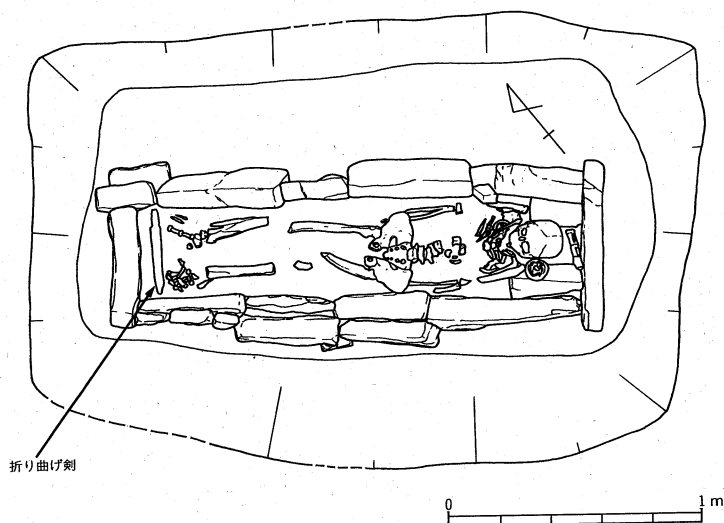


図6 浅川3号墳の副葬品配置

のではないかという考えを採用するのであれば、折り曲げ鉄器に関わるすべての特徴は合理的に理解することができる。『神仙伝』の著者である葛洪の生没年は284-363年であり、日本の古墳時代前期にあたる時期を生きた人物である。折り曲げ鉄器が盛行した時期とほぼ重なるのである。異国とはいえ同時代の記述をもって考古学的事象が合理的に説明できるのであれば、考古学的事象の具体的内容を示す有力候補の一つに掲げて差し支えないであろう。

4. まとめ

前章までに、鉄器の折り曲げ行為は鏡の代わりとなる神仙術の一つである可能性を指摘した。折り曲げ鉄器は、鏡が副葬されないあるいは少数しか副葬されない墳墓に鏡の代わりとして副葬されたと推測したのである。

福永伸哉は弥生時代終末期から古墳時代前期において、畿内政権が儀礼管理を行い各地域の首長に配布する鏡の枚数を管理したという魅力的な見解を示している（福永伸2000）。儀礼管理の存在はともかく、鏡の配布には畿内政権の関与があったことは従来から指摘されている通りであり（小林1961）、鏡の流通には、畿内政権が介在する部分が大きかったと考えられる。鏡の入手・保有は畿内政権との親疎が反映し、それは副葬される鏡の枚数に反映すると考えられる。畿内政権傘下にはない集団、あるいは階層的に政権の把握の外にいる者は鏡を入手しえない、あるいは困難な状況であった。その一方で、神仙思想が汎日本的に広がる中で、鏡の需要は階層を越えて存在したものと思われる。鏡を入手・副葬することが困難な人物あるいは集団がその代わりとして鉄器を折り曲げて副葬したのではあるまいか。

その際に、鉄器の折り曲げ行為が畿内政権を介して全国に広がったとは考えない。畿内での折り曲げ鉄器の出土例は希薄であり、折り曲げ鉄器の

初現も畿内ではなく北部九州である。鏡を入手あるいは階層的に副葬できなかった人物あるいは集団による地域的・階層的対応であると考えられる。

畿内政権の祭祀に強い影響を与えた神仙思想が各地に広まる際に、畿内政権の鏡管理あるいは階層的理由から鏡を入手、副葬が困難な集団や被葬者が存在し、彼らは、鏡の代替品として鉄器を折り曲げて副葬したと考えるのである。

神仙思想あるいは道教の影響が断続的に日本に及んでいると考えられているが、折り曲げ鉄器もそうしたものの一つであると推測する⁵⁾。

本稿を執筆するにあたり以下の方々から、文献収集・資料見学などの点でご協力いただくとともに、貴重なご助言を賜りました。ご芳名を記して感謝申し上げます。

石井智大・岡寺良・重松辰治・杉井健・鈴木一有・高橋照彦・高松雅文・中原計・林正憲・福永伸哉・藤井章徳・三好玄・和田一之輔

注

- 1) これまで、人為的に折り曲げられた鉄器について、決まった用語がなかった。「折り曲げられた鉄器」・「折り曲げた鉄器」・「折り曲げる鉄器」などと呼称されるが、いずれも用語としては長すぎて使いづらいので、「折り曲げ鉄器」とした。
- 2) 愛媛県唐子台10号墳の折り曲げ短剣は、冶金分析の結果、極低炭素鋼であったという（村上1999：p.117）。また、福岡県那珂遺跡の折り曲げ鉄剣は軟鋼あるいは半軟鋼であるという（大澤正己・鈴木瑞穂2001）。
- 3) 弥生時代終末期～古墳時代初頭とは、庄内式成立以降から『前方後円墳集成』（広瀬1992）編年1期までを指す。古墳時代前期とは同編年2～4期、中期は5～7期、後期は8期以降を示す。
- 4) 重松明久は、神仙思想が中国大陸から直接日本に流入したのではなく、朝鮮半島を経由して日本に伝わった可能性を指摘している（重松1969）。鉄器を折り曲げるという行為も朝鮮半島から伝わった可能性が高い。朝鮮半島では、馬山縣洞遺跡・浦項玉城里古墳群・大邱八達洞遺跡・良洞里遺跡などから折り曲げ鉄器が出土しているが、矛が多く、刀剣類は決

して多くはない。

- 5) なお、経塚には少数ではあるが折り曲げられた鉄刀が伴出する例がある(井口1999)。経塚に納められた折り曲げ鉄刀と弥生時代終末期から古墳時代の折り曲げ鉄器との関連は不明とされている(佐々木1988、井口1999)。しかし、経塚は修験道との関連が説かれており、その修験道は道教あるいは神仙思想と深い関連があると指摘されている。このことから考えれば、経塚の折り曲げ鉄刀も神仙術に由来する行為である可能性が考えられよう。

参考文献

- 今井 堯 1992「吉備における鏡配布体系」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社、岡山: pp.23-45
- 井口喜晴 1999「折り曲げられた鉄刀を伴出する経塚遺物」『鹿園雑集』奈良国立博物館紀要創刊号、奈良: pp.45-51
- 今尾文昭 1989「鏡一副葬品の配列から一」『季刊考古学』第28号 雄山閣出版、東京: pp.43-48
- 大澤正己・鈴木瑞穂 2001「鉄剣・鉄刀の金属学的調査」『羽根戸南古墳群』第3次調査 福岡市教育委員会、福岡: pp.271-275
- 小林行雄 1961「同范鏡考」『古墳時代の研究』青木書店、東京: pp.95-133
- 佐々木隆彦 1988「折り曲げた副葬鉄器」『九州歴史資料館研究論集』23号 九州歴史資料館、福岡: pp.1-15
- 重松明久 1969『邪馬台国の研究』白陵社、東京
- 都出比呂志 1998『古代国家の胎動』日本放送出版協会、東京
- 長谷川達 2001「剣を折る・鏡を割る」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会、京都: pp.109-120
- 広瀬和雄 1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社、東京: pp.24-26
- 福永伸哉 1995「三角縁神獣鏡の副葬配置とその意義」小松和彦・都出比呂志編『日本古代の葬制と社会関係の基礎的研究』大阪大学文学部、大阪: pp.25-78
- 福永伸哉 1998『古墳時代政治史の考古学的研究—国際的契機に注目して—』平成7~9年度科学研究費補助金(基盤C)研究成果報告書 大阪大学文学部
- 福永伸哉 1999「古墳の出現と中央政権の儀礼管理」『考古学研究』第46巻

第2号 考古学研究会、岡山：pp.53-72

福永伸哉 2000「古墳における副葬品配置の変化とその意味—鏡と剣を中心にして—」『待兼山論叢』第34号：1-24

福永光司 1973「道教における鏡と劔」『東方学報』第45冊 京都大学人文科学研究所、京都

藤田和尊 1993「鏡の副葬位置からみた前期古墳」『考古学研究』第39巻第4号 考古学研究：pp.27-68

北條芳隆 1994「四国地域の前期古墳と鏡」『倭人と鏡』その2—3・4世紀の鏡と墳墓— 埋蔵文化財研究会、大阪：pp. 147-155

本田 濟ほか（訳）1969『抱朴子 列仙伝・神仙伝 山海経』平凡社、東京

村上恭通 1999『倭人と鉄の考古学』青木書店、東京

遺跡・古墳のデータ出典

大道小学校校庭遺跡 1号石棺：中村幸史朗ほか1984『方保田東原遺跡』
 (2) 山鹿市立博物館調査報告書3・4集 山鹿市教育委員会／池の上1号墳
 3号主体：橋口達也1979『池の上墳墓群』甘木市文化財調査報告第5集／池の上1号墳4号主体：橋口達也1979（前掲）／竹並A-1 2号墳第1主体：佐田茂ほか1979『竹並遺跡』竹並遺跡調査会／高島遺跡S-1石棺：栗山伸司1987『高島遺跡調査概報』北九州市教育委員会／七曲山第3号墳B主体：石山勲ほか1979『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X X VII 福岡県教育委員会／若八幡宮古墳：柳田康雄ほか1971『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会／祇園山古墳周辺石蓋23号土坑墓：石山勲ほか1979（前掲）／唐人塚2-4石蓋土坑墓：川述昭人ほか1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X VIII 福岡県教育委員会／唐人塚2-5石蓋土坑墓：川述昭人ほか1977『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X VIII 福岡県教育委員／妙見14号墓：佐々木隆彦ほか1994『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』29 福岡県教育委員会／妙見17号墓：佐々木隆彦ほか1994（前掲）／徳永神手8号墓：柳田康雄ほか1997『徳永川ノ上遺跡』III 福岡県教育委員会／穴ヶ葉山72号墓：大平町教育委員会1993『穴ヶ葉山遺跡』大平村文化財調査報告書第8集／原田遺跡墓群C 1号墓：嘉穂町教育委員会1987『嘉穂地区遺跡群』IV 嘉穂町文化財調査報告書第7集／博多遺跡方形周溝墓：大庭康時1995『博多』48 福岡市教育委員会／羽根戸南G-3古墳：福岡市教育委員会2001『羽根戸南古墳群』／那珂遺跡：長屋伸1999『那珂22』福岡市埋蔵文化財調査報告書第597集／松ノ尾1号墳：徳永博文1993『松ノ尾古墳群』志免町文化財調査報告書第4集／新町

遺跡7号石棺：小池史哲ほか1990『新町遺跡』Ⅲ 志摩町文化財調査報告書第10集／新町遺跡2号甕棺小池史哲ほか1990（前掲）／草場第2遺跡68号土坑墓：大分県教育委員会1989『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（1）／草場第2遺跡72号土坑墓：大分県教育委員会1989（前掲）／朝日北ST01号墳1号主体：高瀬哲郎ほか1992『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』（15）佐賀県教育委員会／朝日北ST10号墳1号主体：高瀬哲郎ほか1992（前掲）／西一本杉遺跡ST008：松尾吉高ほか1983『西原遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（3）佐賀県教育委員会／熊本山古墳：木下之治・小田富士雄1967『佐賀県文化財調査報告』第16集／桂見墳墓1号墓第1主体：船井武彦ほか1984『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団／妻木晩田14号墳第1主体：大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書』Ⅲ／奥才14号墳第1主体：鹿島町教育委員会1985『奥才古墳群』／奥才14号墳第2主体：鹿島町教育委員会1985（前掲）／覚寺12号墳：松下利秀ほか1990『覚寺古墳群』中国建設弘済会・覚寺古墳群調査団・建設省中国地方建設局／西谷16号墳：米山智弘ほか1993『西谷15・16号墓発掘調査報告書』出雲市教育委員会／袋尻4号墳土器棺1998『袋尻遺跡群発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第76集／石槌山1号墳：高倉浩一ほか1981『石槌山古墳群』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財センター／石槌山権現5号墳：高倉浩一ほか1981（前掲）／矢谷四隅突出墓No.1主体：金井亀喜ほか編1981『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財センター／殿山10号墳第1主体部：平井勝1982『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47／殿山12号墳：平井勝1982（前掲）／川戸2号墳：宇垣匡雅1995『川戸古墳群発掘調査報告書』大原町教育委員会／用木1号墳：神原英朗1975『用木古墳群』山陽町教育委員会／有本1号墳第2主体：小郷利幸ほか1997『有本古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集／有本2号墳第1主体：小郷利幸ほか1997『有本古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集／近長丸山1号墳：小郷利幸1992『近長丸山古墳群』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集／近長丸山2号墳：小郷利幸1992（前掲）／みそのお遺跡42号墳第3主体：椿信治ほか1993『みそのお遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87／みそのお遺跡42号墳第5主体：椿信治ほか1993（前掲）／西山3号墳：内藤善史ほか1996『田益新田遺跡・西山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告109／浅川3号墳：内藤善史ほか1998『高下遺跡 浅川古墳群ほか 楢原古墳群 根岸古墳 一般国道2号改築工事（岡山バイパス）に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告

123／奥第3号墳箱形石棺：古瀬清秀ほか1985『寒川町史』寒川町／唐子台第10号丘4号土壙：今治市教育委員会1974『唐子台遺跡群』／唐子台第3号丘土壙墓：今治市教育委員会1974（前掲）／朝日谷2号墳A主体：梅木謙一ほか1998『朝日谷2号墳』松山市教育委員会・松山市生涯学習財団埋蔵文化財センター／白鷺山古墳：松本正信1984「Ⅲ 龍野市とその周辺の考古資料」『龍野市史』第4巻 龍野市／養久山1号墓第6主体：近藤義郎ほか『養久山墳墓群』揖保川町教育委員会／住吉宮町遺跡3号墳：神戸市教育委員会1999『住吉宮町遺跡 現地説明会資料』／権現山51号墳：近藤義郎ほか1991『権現山51号墳』刊行会／東山15号墳：菱田哲郎ほか1999『東山古墳群Ⅰ』中町文化財報告20／内場山墳丘墓 SX14：岡崎正雄ほか1993『内場山城跡』兵庫県文化財調査報告第126冊／今井1号墳：藤井利章ほか1984『奈良県遺跡調査概報』1983年度第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所／石光山8号墳：千賀久ほか1976『葛城石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊／タニグチ古墳：西藤清秀1996『タニグチ古墳群（付 タニグチ墳墓群）発掘調査報告』高取町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所／住川2号墳：福田さよ子ほか1993『奈良県遺跡調査概報』1992年度奈良県立橿原考古学研究所／小泉大塚古墳埴輪棺：今尾文昭1990『奈良県遺跡調査概報』1989年度第1分冊奈良県立橿原考古学研究所／新沢千塚109号墳：山田良三ほか1981『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39冊／野山遺跡野山支群第4号墳北棺：楠元哲夫ほか1988『野山遺跡群Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第56冊 奈良県立橿原考古学研究所／野山遺跡野山支群第5号墳北棺：楠元哲夫ほか1988（前掲）／龍王山B-10号墳：河上邦彦・松本百合子1993『龍王山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第68冊 奈良県立橿原考古学研究所／牧野古墳：河上邦彦ほか1987『史跡牧野古墳』広陵町文化財調査報告第1冊／見田大沢2号墳：奈良県立橿原考古学研究所1982『見田・大沢古墳群』／八尾寺第2号墳：奈良県立橿原考古学研究所1983『奈良県遺跡調査概報』1981年度／三坂神社裏7号墳第1主体：今田昇一ほか1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』大宮町文化財調査報告書第14集／三坂神社裏6号墳第3主体：今田昇一ほか1998（前掲）／今林8号墓：福島孝行2000「今林古墳群の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第78冊京都府埋蔵文化財調査研究センター／ゲンギョウの山5号墳：三好博喜ほか1987『京都府遺跡調査概報』第24冊京都府埋蔵文化財調査研究センター／高山12号墳：増田孝彦ほか1988『京都府遺跡調査概報』第29冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター／太田南2号墳：肥後弘幸ほか1991『太田南古墳群—太田南

2・3号墳、矢田城跡発掘調査概要一』京都府弥栄町文化財調査報告第7集
／苗代2号墳第5主体：松尾史子ほか1998『京都府遺跡調査概報』第83冊
京都府埋蔵文化財調査研究センター／宮の森古墳3号墳第2主体：増田孝彦
ほか1987『京都府遺跡調査概報』第24冊 京都府埋蔵文化財調査研究セン
ター／豊富谷丘陵遺跡TT1号墳第2主体：増田孝彦ほか1983『京都府遺跡調
査報告書』第1冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター／西山2号墳東柳：
白石太一郎ほか1999『城陽市史』第3巻 城陽市役所／七ツ塚4号墳2号埋
葬施設：杉井健ほか編2002『長岡京市における後期古墳の調査』長岡京市教
育委員会／三田古墳：駒井正明1993『上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳』大阪府埋蔵
文化財協会調査報告書第80輯／宮山1号墳：樋口隆康1993『宮山1号墳調査
報告書』野洲町教育委員会／和田8号墳：佐伯英樹1998『和田古墳群』栗東
町教育委員会／冬頭山崎2号古墳：上出巳吉ほか2000『冬頭城跡・冬頭山崎
1号古墳・冬頭山崎2号古墳・冬頭山崎1号横穴』岐阜県文化財保護センタ
ー第61集／八幡山横穴群3号横穴：松井一明1997『八幡山横穴群』袋井市考
古資料集第3集／城山古墳：大塚淑夫1981『城山古墳発掘調査（第3次調
査）概報』島田市教育委員会／大星山3号墳：土屋積ほか：1996『上信越自
動車道埋蔵文化財調査報告書』7 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告
書20／寺所遺跡SM04：山下誠一1999『寺所遺跡』飯田市教育委員会／溜ノ
台遺跡1号墳：福山俊彰ほか2000『溜ノ台Ⅰ』小山市文化財調査報告書／星
の宮神社古墳：大橋泰夫ほか1986『星の宮神社古墳・米山古墳』／鳥越古
墳：梶山林継1980「木更津市鳥越古墳の調査」『考古学ジャーナル』No.171／
山谷古墳：巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室1993『越後山谷古墳』

脱稿後、京都府浅後谷墳墓と鳥取県松尾頭1号墳より、身部をまるめた鉈
が出土していることを知り得た。本稿の論旨に影響はないが、資料として追
加しておきたい。

(文学研究科助手)

A Study on Bent Iron Implements Buried in Tumuli Japan

Akira SEIKE

This paper aims to examine bent iron implements from the Yayoi Period to the Kofun Period. It is a well-known fact that some of the iron implements were forcibly bent when they were buried in tumuli in Japan. Having observed the data of such bent iron implements, the author reveals that: 1) Most of them are swords and yariganna (a plane used in woodworking) 2) Most of these bent iron tools can be dated from the final Yayoi Period to the early Kofun Period, 3) They were often excavated from small tumuli. Taking into consideration the fact that from the final Yayoi Period to the early Kofun Period is the time when new funeral practices symbolized by the Keyhole-shaped tumuli had been introduced, the author concludes that the mortuary ceremony in which bent iron tools were used had been created in accordance with the diffusion of this new mortuary custom. Helped by the description in Chinese chronicles, he concludes that bent iron implements were believed to have the same mystical effects of bronze mirrors so that bent iron tools were adopted in the funeral practice as a substitute for mirrors by those people who had difficulty in procuring bronze mirrors from the central authority.

キーワード：折り曲げ鉄器 鏡 神仙思想 弥生時代終末期